ドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスの取り組み

– 写真を介した話し合いによる幼児理解の広がりと深まり –

中村　萌　（認定こども園母の会）
澤田　ゆい（認定こども園母の会）
高橋　健介（東洋大学）

1．はじめに

❶保育実践とドキュメンテーションについて

- 2015年4月よりスタートした「子ども・子育て支援新制度」では、「保育の量」を確保するとともに、**「保育・幼児教育の質の向上」**が求められている。
- 「保育・幼児教育の質の向上」の手だての一つとして、これまでは主に保育者や保育者間で活用されていた保育記録を、幼児や保護者などにも広げて活用し、共有することが注目されてきている。いわゆる**「保育記録の可視化」「保育の見える化」**への転換である。
- 「保育記録の可視化」への注目は、イタリア北部レッジョ・エミリア市の保育実践における**「ドキュメンテーション」**に拠るところが大きいが、ドキュメンテーションとは、写真やその写真に添えられた文言などによって幼児のプロジェクト活動（遊び）やそこでの学びを記録するものである。
- ドキュメンテーションは、幼児のプロジェクト活動（遊び）が幼児自身の興味・関心や志向性に基づいた活動として展開されるよう、常に**保育者が幼児の興味・関心事を測り、確認する**ことに用いられている。
- ドキュメンテーションを可視化し、幼児、保護者、保育者が共有することで、保育実践における幼児の学びや育ちを互いに確認（幼児理解）しあい、その先の保育実践を深く、広く見通すことにつながることに意義があると考えられている。

❷保育カンファレンスにドキュメンテーションを用いることについて

- 保育カンファレンスとは、保育の事例を保育者間や外部の人と読み合わせ、その事例について話しあうことである。**保育カンファレンスを通して、他者の多様な読み取りに出会い、幼児やそこでの言動に対する見方を広げることで幼児理解を深めていく**ことにつながることが考えられる。これまでの保育カンファレンスでは、主に保育者によって記述されたエピソード記録がその題材として用いられてきた。
- 情報機器の進歩とともに、ドキュメンテーションの作成や提示が容易になってきており、保育者間でドキュメンテーションを介して子どもの姿を共有することがより可能になってきている。実際の子どもの姿やその周辺の出来事を写真を用いて映し出すドキュメンテーションによって、保育カンファレンスがより活性化されることが考えられる。

＜本研究の目的＞

認定こども園母の会では、認定こども園として多様な生活環境を背景とする子どもたちに対し、特に異年齢や仲間との遊び、生活を通した育ちを重視し保育をおこなっている。さらに、遊びを通した子どもの育ちに対する保育者の読み取りを深め、それを援助に繋げていく試みとして、ドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスに取り組むことにした。そこで本研究では、本園の取り組みから、写真を活用したドキュメンテーションおよびそれを用いた保育カンファレンスによる幼児理解のあり方について検討していきたい。

2．対象園「認定こども園母の会」の概要

- 埼玉県さいたま市浦和の住宅街に、1947年に、その前身である浦和母の会幼稚園が婦人会組織「母の会」によって設立された。

- 2007年12月に家庭保育室を併設し、2009年9月に保育所の認可を受けたことで幼保連携型認定こども園「認定こども園母の会」となった。（新制度においても幼保連携型認定こども園となっている。）

- ０、１、２歳児は「たねの家」の園舎、３、４、５歳児は「木の家」の園舎で主に生活し、それぞれの園舎は横断歩道を隔てて（約40m）、別々の場所に位置している。

- 創立以来、キリスト教信仰を土台とした保育を志し、園の基本方針を以下のとおりとしている。
  - ・子どもの遊びを大切にする。
  - ・子どもが日常的な生活を行う場を作る。
  - ・大人と子どもが共に育ち合い、育て合う関係を築いていく。
  - ・個々の子どもの独自性・主体性の確立を目指す。
  - ・人・自然と共に生きることを考える。
  - ・子ども時代を子どもとして安心して過ごすことができるように家庭との連携を行う。

- 乳幼児の自発的、主体的な遊びを中心に保育が展開されているが、３、４、５歳児では異年齢や学年ごとのグループ（クラス）を構成し、集まりや活動をおこなっている。

・真﨑みよ子．幼保一体型施設の現状と今後の課題．保育の実践と研究．第18巻第2号．相川書房．2013．29－34
・中村萌．幼稚園と保育園の子どもが生活の場を共にするとは －それを支える大人の働き－．保育の実践と研究．第19巻第2号．相川書房．2014．23－33

３．第1期（2015年9月～2016年3月）の研究について

目的：第３者（高橋健介）によって作成されたドキュメンテーションを用いて、保育カンファレンスにドキュメンテーションを活用することの効果について検討する。

❶ドキュメンテーションの作成

- 高橋が、２週に１回のペースで「認定こども園母の会」を訪問し、９時30分頃～11時30分頃の間に、その日に指定されたグループ（「たねの家」もしくは「木の家」）の子どもたちの生活や遊びを観察しながら、コンパクトデジタルカメラ※ で撮影した。撮影には、特に、子どものモノ（環境）とのかかわり、その基盤となる人（他児、保育者）とのかかりに着目して撮影した。

  ①９月29日　②10月13日　③10月20日　④10月２7日　⑤11月９日　⑥11月17日　⑦12月1日　⑧12月15日
  ⑨12月22日　⑩1月5日　⑪1月26日　⑫ 2月1日　⑬2月17日　⑭3月2日　⑮3月18日　計15回
  ※OLYMPUS TG－850（焦点距離：21～105mm [35mmカメラ換算]）

- 高橋は、観察後の12時頃～13時30頃に、職員室にて撮影した写真（１回100枚～120枚）から使用する写真を選択し、「Power Point」を用いてスライド２枚分のドキュメンテーションを作成した。1枚のスライドには、６～10枚の写真を使用し、それぞれの写真にコメントを付けた。写真の選択には、なるべく遊びの経緯が伝わるよう連続して撮影したものを選択した。本ドキュメンテーションは、実際は公開していないが、保護者等に公開することを前提として作成した。

- 主に遊びの面白さや育ちといった観点から作成した２枚のドキュメンテーションの他に、その日の抽出児の気になった場面の写真をスライド（１～２枚）にした。この抽出児写真記録は、主に職員間での利用を前提として作成した。

10月27日の様子（たねの家）

園庭では、身近な生き物と出会い、魅了されながら、友だちと一緒に学びあっています。

２歳児　カナヘビが畑に出てきて・・・

みんな興味深々

ドキドキしながら、触ってみました。
一人がやり始めると・・・

今度は自分でもナメクジを見つけました。これならじっくり見れます。

一人が土の石ひろいを始めると・・。やっぱり一緒にやりたいのです。

チューリップのプランターづくりでは、ナメクジが出てきました。
遠くから眺めている子どももいます。

やっぱりみんなが集まってきました。

❷ドキュメンテーションを用いた保育カンファレンス

- 各観察日の14時10分～15時10分に、ドキュメンテーションを用いて保育カンファレンスをおこなった。カンファレンスには、ほぼ全学年（１～５歳児）の担当保育者、園長、主任が参加した。各回10名ほどの参加があった。

- 保育カンファレンスは、まずはドキュメンテーションを作成した高橋からそこに添付された写真について、その子どもや遊びなどに対する読み取りを説明した。また、話題になった子どもやその場面について、担任保育者の立場からも読み取りが説明された。その後、参加者それぞれが印象に残った場面について、気づいたり、考えたことを出し合い、カンファレンスをすすめた。

- ６回目（11月17日）の保育カンファレンス後に、「ドキュメンテーションを用いた保育カンファレンス」に関するアンケートを実施した。

❸考察（第１期の取り組みより）

● 保育の最中では見えていなかったことへの気づき

集団保育の特に遊び場面では、保育者はある個や集団を見取り、必要に応じてその子どもを援助する。したがって、担当する全ての子どもを常に見取ることはとても難しい。その一方で、保育者は、見えていなかった子どもの姿やその思いも、その前後の姿などからある程度推測することも必要である。保育カンファレンスを通して、見えていなかった子どもの姿に気づき、そこでの育ちの意味を考えることで、推測することによって、幼児理解を補っていくことの意味を考える機会となっている。

- 「保育中には気づかなかった子どもの動きや表情を見ることができ、子どもの思いを知る手がかりになることを知りました。」（乳児クラス担当）
- 「写真を撮って頂き、様子を細かく分かりやすく教えていただけることで、私には見えていなかった子どもの姿や別の一面、また遊びのつながりが見られ、とても勉強になりました。」（幼児クラス担当）

● 客観的、俯瞰的な視点への気づき

実際のある場面を映しだすドキュメンテーション（写真）によって、冷静にその場面を見取ることで、子どもやその行為への捉え方が広がってきている。思い込みがあったり、周辺の状況に気づいていなかったりと、忙しい保育の最中では客観視することが難しい状況において、保育カンファレンスを通して、客観的、俯瞰的な視点の必要性を改めて認識していることが考えられる。

- 「映像の客観性という視点だからこそ得た“学び”がたくさんあった」（乳児クラス担当）
- 「保育を外から見るということ、客観視することの大切さを改めて感じました。そのことにより様々な角度から子どもを捉えることができ、新しい気づきも多くありました」（幼児クラス担当）

● 多様な視点からの読み取りの広がり

ドキュメンテーションを通して、実際の子どもの姿を確認し、これまでに捉えきれていなかった子どもの新たな一面に気づく機会となっている。また、話し合いを通して、複数の他者の捉え方にも耳を傾け、自分自身の捉え方と相対化することで、子どもやその遊び、育ちに対する読み取りを広げ、深めていることが考えられる。

- 「子どものある一場面の姿を様々な保育者が見て、それぞれの意見を出し合うことで、自分にはない見方、感じ方、関わり方を知ることができ、自分の関わり方を振り返るきかっけともなり、大きな学びの時となりました」（乳児クラス担当）
- 「カンファレンスを通して、いろいろな保育者の見方を話し合うことで、広い視野で考えることができ、次の日どのように子どもと関わろうかその道すじを立てることができた」（幼児クラス担当）

● 連続性を考慮した読み取り

多くの子どもを見る、時にはある子どもにかかわることが前提の保育者は、連続性を考慮しながら子どもの姿を見取ることは難しい。ドキュメンテーションもある場面を切り取ったものではあるが、ある程度連続的な写真が提示され、前後の意味を確認しあうことで、連続して読み取る（推測を含む）ことの必要性を考える機会となっている。

- 「乳児の保育をすすめる中で、気にかかる子どもの行動を点でできても、なかなか線で追うことが難しいと感じる中、写真を通して行動がつながり、子ども理解へと深められて、その後の保育に参考となった」（乳児クラス担当）
- 「ひとりの子どもの遊び傾向、動きをずっと追うことができるので、何か出来事があったり、遊びの展開でどうしてそうなったのか？という前後の様子がよく分かる」（乳児クラス担当）

● 保育者間（非公開）で活用する写真記録について

保育者からは写真記録の題材にその時々で気になっている子どもを取り上げてほしいとの要望があり、実際のカンファレンスでもそのことを話題にすることが多かった。公開を前提とするドキュメンテーションでは、課題をもつ子どもやその場面を取り上げることはなかなか難しい。よって、公開されるドキュメンテーションは、特に気になる子どもやその場面の保育者側の幼児理解については限定的に表されるところもあり、それを補う写真記録やそれを用いた保育カンファレンスも必要と考えられる。

- 「気になっていた子どもについて、写真を通して気づくこと（普段保育をしていると見えない姿）が出来ました。（本当は何を求めているのか？視線の先にあるものは・・・・）」（幼児クラス担当）
- 「今後も気にかかる子どもの姿を取り上げて頂きたいと思います」（乳児クラス担当）